

寺院が所持する大奥関係資料

畑 尚子*

目次

はじめに

1. 寺院が所持する資料の分類
2. 大奥関係文書の概要
3. 大奥関係資料を所持する寺院の特徴

おわりに

キーワード 大奥 表使 寺院 祈祷寺 祠堂金 開帳

はじめに

大奥に関する資料が徳川家とゆかりのある寺院に残されている可能性については、拙著『徳川政権下の大奥と奥女中』（岩波書店、2009年）で指摘したが、今回、展覧会「大奥女中とゆかりの寺院」を江戸東京たてもの園で開催するに当たり、実際に調査してみると予想を超えるものであった。このことから、近世において大奥は寺院と密接な関係にあったと捉えることができる。

奥女中は雑役に従事する下女、主の日常生活の世話及び家の存続にかかわる任務を帯びる側女中と、姻戚関係にある大名家との音信贈答を中心とする儀礼行為にかかわる役女中とに分けられる。従来、役女中の職掌については、贈答儀礼に関する交際や奥向ルートを使っての内願交渉に焦点が当てられてきた。しかし、今回膨大な史料を確認できたことにより、寺院との折衝が役女中の職掌なかでも大きな割合を占めていることに気付かされた。高木昭作氏は奥女中の任務として「祈祷を事とする宗教家との付き合い」を挙げている¹⁾。任務となった時期や経緯など具体的な解明は今後の課題とし、本稿ではどのような寺院がどのような大奥関係資料を所持しているかを詳らかにして、今後の研究や所在の確認に役立てることを目的としたい。

※徳川将軍については初見のみ代数を付した。

*東京都江戸東京博物館学芸員

1. 寺院が所持する資料の分類

寺院が所持する大奥関係資料はその性格から什物、墓石（石塔・墓誌を含む）・過去帳、古文書の3つに分けて考えることができる。

仏像や仏具、仏典など仏事に関わるものは什物として特に大切に扱われ、信仰の対象であり、そもそも一般の研究や閲覧には供さないという考えも強くある。什物の内、打敷（仏像を安置する須弥壇や前机に引く布）・戸張（厨子内の尊像の前や社殿の前に掛け簾の役割を果たす）・水引（机類の側面四方を囲み覆う）の荘厳具は大奥よりの寄進例が多く見られる。開帳時に大奥から葵紋付の荘厳具の寄進を受ける例は、身延山久遠寺（山梨県）、長命寺（滋賀県）などに見られる。正泉寺（千葉県）には月光院付老女江島から打敷、天英院から水引が奉納された。小袖を仕立て直して打敷として奉納する事例もある。供養のため、亡くなった将軍の子女が生前に着用していた小袖を仕立て直した打敷もある。妙定院（東京都港区）の9代将軍家重の尊牌を納める厨子を、同将軍御付老女松島と岩橋が新調し、厨子の戸張や諸道具を葵紋付にするよう指示した。葵紋付の什物を戴くことは、寺院にとって格式の一つとなった。しかし、記録に記載されている荘厳具の所在を尋ねると現存しないことが多い。

江戸城内で安置されていた将軍家ゆかりの仏像や念持仏の寄進も大奥からなされた。各寺院には伝承されているが、書付などの裏付けがあるものは少ない。奥女中の寄進によることが刻まれている石仏・石塔が立山、身延山、善光寺などに残っている。法要などで用いる経典を追善のため菩提寺などに納める者もいる。岩橋は家重の菩提を弔うため阿弥陀経を紺紙に金泥で書写し妙定院に納めた。本丸御年寄瀬山が書写した妙法蓮華経8巻が所願寺（千葉県）に残る。

江戸時代から堂宇などを維持し、経営していくことは寺院にとって大きな課題であった。現在その問題はもっと深刻になっており、寺の運営上墓地を確保するため子孫の絶えた古い墓石を排除し合葬にしまう例はよく見られる。実はその墓石こそが貴重な資料となるのである。墓石には戒名・没年・享年だけでなく、簡単な経歴を刻印したものもある。ある程度名が知られている人でも生没年や出自が不明な人は多く、墓石が唯一の手掛かりとなることがある。大河ドラマで「篤姫」が放映されている時、天璋院付老女幾島の招魂墓が見つかった。生没年だけでなく、両親の名前や本人の経歴までも詳らになった。

しかし、墓石がなくなるのは寺側の事情ばかりではない、子孫が墓を一カ所にまとめるため別の所に引き移す例もある。柳沢家の菩提寺である月桂寺（東京都新宿区）には、かつて5代将軍綱吉の大奥で女中達を束ねる立場にあった右衛門佐の墓があったが、子孫が地元に移した。やむなく墓石は取り払ったが、内容は拓本を取って残すという方法を選択したのは円福寺（東京都新宿区）である。墓石と近い情報は過去帳からも得ることができる。さらに過去帳には埋葬されていない人物も載せられており貴重な資料であるが、個人情報の保護により、その利用は慎重を期さねばならない。

2. 大奥関係文書の概要

次に各寺院の古文書について概要を見ていきたい。ここでは寺院の概要、大奥関係資料とその概要を述べ、関係する奥女中を紹介する。合わせて、史料目録と列挙した史料を活字化した翻刻本及び参考文献があれば列記する。尚、所蔵先が同寺院でない場合のみ所蔵先を記載した。

①妙定院（東京都港区 浄土宗）

妙定院は9代将軍家重を開基とし、増上寺第46世妙誉定月を開山とする寺院である。芝増上寺山内の別院として建立され、家重（惇信院）の中陰の尊牌を祀る。定月は宝暦6年（1756）に増上寺第46世住職に任ぜられた。宝暦7年には江戸城で家重に拝賀し、同11年6月に家重が薨去すると定月は葬儀の大役を務め、法会や供養などすべてを主導した。家重の一周忌法要が済むと定月は隠居願いを幕府に提出するが慰留される。山下谷別院は定月の別荘として許可され、宝暦13年11月妙定院として起立される。

妙定院祠堂金之控（安永10年）、日史（宝暦12年正月～嘉永7年）、無題（妙定院定書、岩橋書状他）、記録定阿、記録（宝暦13年～寛政元年）、記録（宝暦13年～天明8年）、妙誉大僧正以上使御隠居料御拝領次第記（明和7年）、覚（金三百両受納二付）、大納言遺金書付、滋野井中将妹とき上藤御年寄とする書付、とき宛行書付、請取申祠堂金之事、覚（色紙掛物受取二付）、印證

妙定院が家重の尊牌を祀る寺院であることから、当然家重付女中と密接な関係を紡ぐこととなる。家重期の大奥を支えた老女は松島と岩橋である。二人からは明和8年（1771）に惇信院（家重）永代供養料300両が納められ、惇信院尊牌の厨子を新調し厨子の戸張や諸道具を葵紋付にするよう指示された。葵紋付の什物を戴くことは、寺院にとって格式の一つとなった。300両の祠堂金を妙定院は一旦増上寺方丈役所へ渡し幕府に上納し、伊奈半左衛門へ貸付け、一定の利潤を受け取るように企図している。祠堂金の運用つまり金融業はすべての寺院に認められていたわけではなく、増上寺・寛永寺をはじめ、信州善光寺・身延山久遠寺・池上本門寺・鎌倉東慶寺などが幕府より、鎌倉英勝寺などが水戸家より公認²⁾されていた。ここからは推察の域を出ないが、大奥女中が多額の寄進をする理由として、祠堂金貸付けの利潤から一定額を受け取っていた可能性があるのではないかと考えられる。つまり寺院に対して大奥が一方的に金銭の支援をしていたのではなく、女中側にもメリットがあったのではないだろうか。

妙定院には公家滋野井の人々の供養塔がある。岩橋は滋野井実全の娘で、宝暦3年11月家重付上藤御年寄となる。松島は家重が大御所となり隠居した後も本丸大奥に留まり、10代将軍家治の時代に権勢を伸ばした。一方岩橋は隠居した家重に従い二丸（家重は西丸ではなく二丸で隠居）に移り、家重薨去後は家治世子家基付老女となり西丸で暮らし、家基（安永8年2月24日死去）没後に剃髪し栄真院と名を改めた。岩橋はその後も、孝恭院（家基）遺金や家重・家基供養料の寄付を行っている。

また、岩橋を通じて家治御台所倫子（心観院）、家基生母おちほ（蓮光院）、家治養女種姫（貞恭院）も妙定院への信仰を深めていることは「無題（妙定院定書、岩橋書状他）」などよりわかる。家重・家治付老女浦尾も過去帳に記載され、書付も残していることから妙定院縁の女中ということが出来る。諸記録や過去帳に記載が有る清智院は家重付表使、離染院も家重付女中と思われるがその素性は分明しな

い。離染院は「御本丸 左寶司 安藤氏」とあることから、安藤家の出身といえるが左寶司が役職名か詳らかでない。明和2年8月に没しその墓も妙定院にある。【表1】

参考文献：野村恒道・伊坂道子『妙定院史』妙定院、2008年

伊坂道子『芝増上寺境内地区の歴史的景観：その建築と都市的空間』岩田書院、2013年

②濟松寺（東京都新宿区 臨濟宗）

濟松寺は京都妙心寺派の臨濟宗寺院で、17世紀半ばに3代将軍家光の命により江戸牛込の地に創建された。開基は祖心尼。大奥に入った祖心尼に禅法を尋ねるようになった家光は、正保3年（1646）10月に幕府祐筆大橋龍慶の拝領屋敷であった土地を祖心尼に寺領として与えた。寺院の建築はひとまず延期され仮普請がなされた。慶安4年（1651）4月家光が他界すると、大猷院御霊屋の造営が開始され承応元年（1654）3月に作事が終了した。

記録見出、御仏殿再興記録（宝暦13年）、御仏殿造営日記（宝暦13年7月～12月・宝暦14年正月～明和元年8月）、公向文格之事、御由緒書、濟松寺起立之訳・御霊屋之訳・祖心之訳・御建立御修復之訳、芳心院書状2通、祖心書状2通、祖心宛書状6通、家綱付老女宛書状、近江書状、五条他千代姫付老女書状、高遠他書状

濟松寺の大奥関係文書は、開基である祖心尼関係書状と大猷院（家光）御霊屋普請など起立に関するものと、宝暦・明和の仏殿再興に関する史料に大別できる。祖心は春日局の縁につながる女性で、家光と4代将軍家綱2代にわたり仕えた。家綱付女中近江・梅・矢島・川崎・岡山を交渉相手とする他、久世大和守広之、稲葉美濃守正則、酒井讃岐守忠精ら老中とも直接金子についてのやりとりをしている。祖心にとってはひ孫にあたる千代姫の御付老女らと大猷院位牌の相談をしている。

享保10年（1725）の類焼で大きな被害を蒙った仏殿の再興は、40年以上経った宝暦12年（1762）からようやく具体化した。材木を調達し再建に取り掛かり始めた矢先、翌13年2月に再び類焼の憂き目に会い、調達した材木も燃やしてしまう。同年9月仏殿再興のため、松島ら大奥からの口添えで銀200枚を拝領できた。仏殿再興における濟松寺の大奥への交渉は正攻法である。将軍家治付表使富田・藤野・民野・生駒を仲介役として、同老女松島・高岳・浦尾・（砂野）・岩瀬・滝川・梅田・清橋へ書状を送っている。時の権力者である松島個人に直接働きかけはしていない。濟松寺は大奥への文で、当寺は大奥との縁、大猷院の厚き思召により建立された寺院で、度々の修復も奥向よりの沙汰や世話により成就されてきたことを強調している。濟松寺は大猷院の法事を執り行う寺院で、4月20日の家光命日には表使が訪れる慣習で、近くなると参詣の案内を送っている。仏殿再興で個人的やりとりをしているのが、局と呼ばれる老女である。局とは御台所や御簾中など女主に付属する老女の一人に与えられる役名で、濟松寺が文通している局は家治御台所倫子付と勘案できる。倫子（心観院）は明和7年（1770）再建の節に白銀100枚、同8年に祠堂金100両を寄付した。仏殿再建には御台所のバックアップがあったと推察できる。

濟松寺塔頭・御霊屋別当芳心院の開基芳心は、幼少期の綱吉の世話をした人物である。その労に報いるため桂昌院が、大猷院御霊屋別当として一院を建立させた。桂昌院が係わった寺院の多さを実感する

ものである。

史料目録：『濟松寺 蔭涼山濟松寺文化財調査報告書』新宿歴史博物館、2004年

翻刻史料：『牛込寺社書上五 濟松寺文書』蔭涼山濟松寺、2005年

参考文献：湯浅隆「江戸城大奥を介在した寺院建物修復費用の調達—江戸西郊牛込の濟松寺の場合—」
（『駒沢史学』第77号、2012年）

③護持院（真言宗）

慶長14年（1609）頃から將軍家の祈祷寺・祈願所となり幕府瓦解までその役割を果たす。筑波山中禪寺の学頭知足院は將軍家の祈祷を行うようになると、江戸白金辺りに宿所（江戸別院）を与えられた。隆光が知足院の住職となると、綱吉は厚く庇護し、江戸城近くの神田橋外に大伽藍を造営して、知足院を護持院と改称する。享保2年（1717）火災により焼失するが8代將軍吉宗は再建を認めず、同宗である護国寺内に移転させた。明治期に廃され、寺地はそのまま護国寺（東京都文京区）に引き継がれた。

神田橋護持院日記（元禄15年～宝永8年）8冊、護持院日記（享保2年～慶応4年）約700冊、護持院役者手鑑、御本卦御祈御頼帳〔以上、護国寺所蔵〕、年中行事付臨時雜記（寛政8年7月～同10年3月の間に成立）〔つくば市在杉田家所蔵〕。

護持院の日記については『神田橋護持院日記』の解題で、坂本氏が詳細に分析しているのでここでは割愛する。そこで坂本氏が述べているように『護持院日記抄』は『隆光僧正日記』の抜粋であるため、下記の翻刻史料からは外した。しかし、大量にある護持院の日記のうち翻刻されたのは、隆光が住職であった時期のものに限定されている。隆光が綱吉と桂昌院の寵愛を受け、護持院が特異な状態にあった時期に当たり、『神田橋護持院日記』からも大奥、三之丸、五之丸への登城・祈祷の記事が枚挙にいとまがなく、綱吉や桂昌院の御成りの記事も散見する。

護持院が將軍家祈祷寺として平素の状態を知るには、享保2年（1717）以降の日記の翻刻を待たなければならないが、「年中行事付臨時雜記」より窺い知ることができる。この史料は11代將軍家齊期のもので、一年間（正月から12月まで）の將軍家の祈祷や御機嫌伺い、奥向や寺社奉行に差し出す文書の雛型、献上札の形式などを書き留めたものである。12月13日に大奥で行われる御煤納の祈祷は、神田橋時代から護持院の担当で、そのやり方の詳細も記されている。

翻刻史料：『史料纂集 期外 隆光僧正日記』続群書類従完成会、1969～70年

坂本正仁校訂『史料纂集 神田橋護持院日記』八木書店、2010年

坂本正仁・榎田良道「筑波山護持院「年中行事 附臨時雜記」—將軍家祈祷の実態—」（『豊山学報』第50号～52号、2007年～2009年）

参考文献：榎田良道「御触にみる將軍家祈禱—近世後期を中心に」（『密教学研究』44号、2012年）

④祐天寺（東京都目黒区 浄土宗）

増上寺住職第36世祐天の遺志である念仏道場建立を受け継いだ弟子の祐海により、武蔵国荏原郡下目黒村にあった善久院の寺号を引継ぎ創建された寺院。桂昌院は祐天が牛島に草庵を結んでいたところから

帰依し、度々江戸城大奥に召しその説法を聞いた。宝永2年(1705)の桂昌院死去の際も大奥に呼ばれた。桂昌院死後も、天英院や月光院、竹姫(綱吉・吉宗養女)が帰依し、祐天寺創建に尽力した。

明顕山自寺録撮要、明顕山起立略記、明信院敬仏感応記、文昭院様御新葬記、有章院様御新葬記

祐天寺の史料は同研究所によって翻刻作業がなされ5巻まで刊行されている。大奥に関する内容は第1巻上下に収められた「明顕山自寺録撮要」に記載が集中している。祐天寺の起立には吉宗による新寺建立の禁止など数々の困難があったが、祐海は帰依していた天英院や月光院の後援に期待するとともに、吉宗付老女常盤井・三室・高瀬・外山・田沢に働きかけた。起立の過程から大奥が深くかかわったことが、同史料より読み取ることができる。その後天英院により6代将軍家宣供養のため梵鐘と鐘楼が寄進され(建設費用150両)、延享2年(1745)天英院が生前使用していた御座之間の材木を利用して天英院仏殿が造られた。他に天英院葬送、月光院落飾や「法然上人行状絵図」を将軍の上覧に供した時の記録などを、大奥関係史料として挙げるができる。

天英院や月光院、及び祐天上人像を寄進した松姫(綱吉養女)や阿弥陀如来像を寄進した竹姫など将軍家の女性が祐天寺の信者となっており、合わせてその御付女中も帰依することになる。それ以外にも、数多くの女中が係わりを持っており、そのことは『祐天寺年表』に参考史料として載せられた「本堂過去霊名簿」や墓石より窺い知ることができる【表2】。下馬札拝礼では家治付老女松嶋の世話になっている。祐天寺と特別な関係にあったと思われるのが歌橋ら公家藤波家出身の女性たちである。歌橋(藤波寛忠娘、13代将軍家定付上臈御年寄)、梅小路(藤波季忠娘、歌橋叔母、種姫(家治養女)付上臈御年寄)、裏辻(歌橋姉、田安家上臈御年寄)、岩倉(歌橋妹、溶姫(家斉娘)付上臈御年寄)の4人と、歌橋の部屋方女中千浦の墓がある。

翻刻史料：『祐天寺史資料集』第1巻～5巻 祐天寺、2002年～2010年

参考文献：『寺宝で綴る祐天上人と祐天寺』祐天寺、2005年

『祐天寺年表』第2巻～4巻 祐天寺、1998年～2008年

⑤法養寺(東京都大田区 日蓮宗)

江戸時代初期の慶長年間に神田三河町から下谷稲荷町へ移転し、明治43年(1910)に現在の池上に移転した。法養寺と江戸城大奥との信仰的なつながりは法華信者であった家綱の御台所顕子(高巖院)からで、寛文年間以降にあたる。法養寺の祖師像は江戸城本丸に安置されていたものを高巖院が家綱に懇願して寄進したと伝えられる。法養寺は江戸城両丸(本丸・西丸)及び大奥の祈祷所として位置しており、折々に祈祷を修し、洗米、供物等を献上した。大奥女中は将軍家の武運長久の祈願を依頼し、熊谷稲荷をはじめとする流行神に積極的な祈願を行っている。

竹姫付老女奉文、瀧山書状5通、本丸御使番書状8通、妻絹書状2通、林佐書状4通、杉浦書状2通、岡野・藤江・浜田・嶋田書状1通、長栄・長順・長佐・林佐書状1通、栄寿・林佐・栄佐・林可・久左書状2通、林佐・栄喜・長林書状1通、公用帳(弘化3年・年不詳)、年中献上物並御婦美控、法養寺熊谷稲荷縁起(享保20年)、御祈祷御名前牒

書状のうち最も古いのは、享保18年(1733)に出された竹姫付老女とみ・岡田・藤元・つほね連名の

もので、葵紋付の戸張と水引を寄付するというものである。竹姫は吉宗の養女となって薩摩藩主島津継豊に嫁した。将軍家の女性として重鎮の立場にあり、元文4年（1739）にも東漸寺（千葉県）へ葵紋付の戸張と水引、提灯などを寄付している。さらに史料を探れば、竹姫が寄付した寺院が増える可能性がある。

享保期の史料が若干ある他は、家斉将軍期以降の文書が中心となる。正木氏出身の瀧山は家斉御台所寔子（広大院）付御年寄となり天保11年（1840）8月に死去した。瀧山は法養寺の旦那であったのか、叔母華嶋と共に同寺に埋葬され、その墓はいまも残っている。瀧山が法養寺と大奥との窓口であったことは、瀧山の書状に「祖師様御備へもの其外御初尾も何二而も皆私名前ニ而其御寺へ出シ候由表使衆わたくしへこたへ候ま、さやう思召被下へく候」と記されていることからわかる。また、瀧山は拝殿再興のため30両を寄付している。妻絹は家定付火之番格御使番、杉浦は本寿院付表使、林佐は家定・14代将軍家茂付御伽坊主、岡野以下表使は家定付、御伽坊主の内長栄以下が12代将軍家慶付、栄寿以下が家定付、林佐以下が家茂付となる。

「公用帳（弘化3年）」には大奥の祈祷所となった由緒が記されている他、日光社参、天保15年本丸火災、広大院薨去、家慶薨去、家定の将軍宣下などの際に御伽坊主へ差し出した書状の写しが載せられている。「年中献上物並御婦美控」は祈祷寺としての法養寺の役割と将軍家との関係を知るうえで貴重なもので、護持院の「年中行事付臨時雑記」と同類の史料といえる。

史料目録：『大田区の文化財 第35集 大田区の古文書・書跡・典籍』大田区教育委員会、2006年

翻刻史料：『大田区史 資料編 寺社1』大田区史編さん委員会、1981年

『台東区文化財調査報告書 第44集 台東区の絵巻1 熊谷稲荷縁起絵巻』台東区教育委員会、2012年

参考文献：望月真澄『近世日蓮宗の祖師信仰と守護神信仰』平楽寺書店、2002年

⑥堀之内妙法寺（東京都杉並区 日蓮宗）

元和4年（1618）年頃、覚仙院日逕が母日圓を開山とし、自身は2世となって開いた寺院。元禄年中に起きた不受不施事件を契機に身延山直末寺となり、碑文谷法華寺に安置されていた祖師像を譲り受けた。その後「堀之内のお祖師様」として江戸の庶民に親しまれ、千部会や御会式を行う中で信者を獲得していった。千部会に参加した人の中には御殿女中もいたが、明和6年（1769）の火災で全焼した堂宇の再建には、大奥の力に頼らず講中など信者の寄進によりまかなった。また、妙法寺は鷹狩の際の御膳所に指定され、休憩所として御成間が設けられ、世子時代の家慶や家定および一橋慶喜が訪れている。

巳千部施主控（文政4年7月）、五百五十遠忌寄進帳（天保2年）、御殿向千部巻数控、加州御殿千部施主覚

千部会の施主となることで御殿と妙法寺は繋がりをもっている。「御殿向千部巻数控」より巻数を配った御殿や大名家を列挙すると、本丸、西丸、紀州御殿、清水御殿、小石川御守殿（峯姫）、常盤橋御住居（浅姫）、加州真竜院・宰相・御住居・筑前守、田安御殿、白金細川家、青山隠田黒田家、永田町細川家、和田倉会津家、永田馬場内藤家、三味線堀佐竹家、三味線堀加藤家、渋谷松平式部大夫となる。「巳

千部施主控表」より他に一橋御殿も千部会の施主となっていることがわかる。

史料目録：『妙法寺文化財総合調査』杉並区教育委員会、1996年

翻刻史料：『堀之内妙法寺史料』妙法寺、1974年

参考文献：『霊宝開帳と妙法寺の文化財展』杉並区郷土博物館、2000年

⑦浄光寺（東京都葛飾区 天台宗）

浄光寺は、849年に創建されたといわれる古刹で、薬師如来像を本尊とし木下川薬師として知られている。江戸時代には、将軍家の祈禱所・御膳所として庇護された。江戸城内紅葉山にある歴代将軍霊屋の別当職に任命されてからは、毎年のように将軍家の代参が行われ、時には将軍自身の御成もあった。享保5年（1720）3月に吉宗が放鷹して以来、御膳所に指定された。

御成御跡開帳一件帳（文政4年12月）、大御奥江出候控、普請願向一件日並

浄光寺は天保11年（1840）の火災により、御成の時に使用する御座之間を含め本堂が灰燼に帰した。弘化3年（1846）には寺社奉行に再建費の補助を願い出たが許可は下りず、火災から9年経っても普請ができず御膳所としても差し支える有様であった。「大御奥江出候控」は嘉永元年（1848）3月大奥の権力者姉小路⁴⁾へ出した嘆願書の控で、幕府による修復が叶うよう大奥からの働きかけを依頼し、合わせて先例として初穂料などの名目で大奥からまとまった金額が寄進され、修復がなされていることもアピールした。「普請願向一件日並」はその後の経緯を示したものである。嘉永2年11月御末頭こゝろは惣女中からの寄進として115両を持参してくれた。それを受け、嘉永3年12月に修復が認められ500両が寺社奉行より給付された。しかし、不足が生じたので再びこゝろを通じ願書を差し出したところ、本丸から150両、西丸から50両合わせて200両寄進された。さらにこゝろ初め約60人が初穂として2両2分と2200疋を奉納した。こゝろ以下は仲居や御使番など職制が下の女中たちである。焼失した堂宇の再建を大奥に頼った好例で、大奥を通じての寺社奉行への歎願と大奥からの寄進の双方が叶ったことを示している。

翻刻史料：『葛飾区古文書史料集1 御成記 浄光寺近世文書』葛飾区教育委員会、1987年

⑧遠壽院（千葉県市川市 日蓮宗）

遠壽院は中山法華経寺の山内寺院（塔頭）である。日蓮の弟子となった下総中山の豪族富木常忍が自宅を法華寺とし、この法華寺と太田家ゆかりの本妙寺が合併して正中山法華経寺と号した。遠壽院は「根本御祈禱系授的傳加行所」と称され、また「荒行堂」とも通称されるように正中山修法の相伝を使命とする加行道場である。太田家は江戸城を築城した太田道灌を輩出するが、江戸時代に掛川藩主となった太田家の繁栄を祈念した祈禱札が遠壽院に残る。

大堂祖師江戸開帳并御本丸御上りノ次第略縁起等、清水御殿・尾州御殿御用日記控（文化2年）三御殿御用日記（文化7年）、清水御殿赤坂御殿御用（文政7年）、御符御札守御殿用助檀祈禱用、御寄進（天保10年～15年）、祈禱助檀用向控（弘化元年）、歳中祈禱用年頭暑寒控帖（弘化4年）、祈禱用向諸日記録（嘉永元年11月）、俊徳院様奥章院様御符献上之事・紀伊大納言様御養躰書、大奥向願立之写（安政6年）9月、西海弘通記録（文久元年）、瀧島日記（慶応2年）、妙照院日記（明

治2年)

遠壽院は紀州徳川家、清水家、一橋家、尾張徳川家などの祈禱寺であることが、残された史料よりわかる。記録の残る文化年間から幕末期までその役割を果たしている。寄進帳にもそれらの御殿の御付女中の名前が並ぶ。清水家では貞章院（清水重好正室、伏見宮貞建親王娘）の名前が多く散見する。遠壽院の護符は「一粒護符」と呼ばれるもので、符文に紅原汁を混ぜて細かくして粒状にする。史料には「正五九 御守三ツ 三十粒入り」などと記載されている。正五九は正月五月九月に祈禱を行うということで、護持院や法養寺でも同様である。

江戸城大奥については、表使織江・村瀬・小倉・嶋田など個人から祈禱依頼を受けている。村瀬の母聖尊院は小石川柳町に屋敷を持つ水野氏の娘で、水野重三郎（「御符御札守御殿用助檀祈禱用」などにも名前有）が日蓮上人尊像の体内に納めた願文が昭和50年（1975）に発見された。弘化2年（1845）に記されたもので一橋家の繁栄を願っている。遠壽院にある聖尊院の墓は村瀬が建てたものである。遠壽院は鬼子母神像の京都・九州へ出開帳する許可を得る仲介を、村瀬に依頼している。この出開帳では、当初は和宮を迎えに行く村瀬ら大奥女中らと同行する予定であったが、出立が延期されたため先に江戸を出発した。帰りは行列に同行し、道中で体調を崩した村瀬に加持を行った。

天保12年（1841）10月の智泉院事件以降、智泉院の加持祈禱が禁じられると、遠壽院の役割は大きくなる。智泉院で荒行を行った者の起請文である「謹敬奉捧起請文之事」や智泉院事件で取払われた徳ヶ岡八幡宮の再建を小山・村瀬ら本丸表使に願った文の写しが遠壽院に残されており、史料の少ない智泉院事件を検証できる貴重なものといえる。

幕末期に24世住職となった日照は、大奥の信者獲得に熱心であった。その一人で日照に深く帰依した御客応答格瀧島は、慶応3年（1867）隠居後に尼僧妙照院となり遠壽院へ入った。そこで記した日記（妙照院日記）と現役時代に大奥で記した日記が遠壽院に保存されている。瀧島は日照と共に牛込円福寺に移り、同寺で終焉を迎えた。

参考文献：宮崎勝美「遠妙院日栄「西海弘通記録」について」（『総合修法研究』創刊号、1992年）

⑨浄蓮寺（埼玉県秩父郡東秩父村 日蓮宗）

武蔵国秩父郡に建てられた浄蓮寺は、鎌倉時代末期の郷士大河原神治太郎光興の草創と伝えられる。扇谷上杉の宰相の一人で後に後北条氏の家臣となる松山城主上田氏の菩提寺である。天正19年（1591）には早くも徳川家より寺領20石の朱印を賜る。

田安家老女（裏辻以下）奉文（天保6年a）、本家（家斉）付老女奉文2通（天保7年b・8年c）、御台所（寔子）付老女奉文（天保7年d）、西丸老女（家慶・家祥・喬子）奉文（天保7年e）、紀州家（齊順）老女（高倉以下）奉文（天保7年f）、松栄院付老女（倉橋以下）奉文（天保7年g）、園橋以下御簾中付老女奉文（天保7年h）、西丸老女（家慶・喬子）奉文（天保8年i）、家祥（家定）付老女奉文（天保8年j）

大御所（家斉）付老女奉文2通（天保8年kl）、大御台所（寔子）付老女奉文2通（天保8年mn）、本家（家慶）付老女奉文2通（天保8年op）、御台所（喬子）付老女奉文（天保8年q）、家祥付老

女奉文3通(天保8年rst)、本丸老女奉文(天保9年u)、西丸老女(家齊・寔子)奉文(天保9年v)

これらの書状はすべて鼠山感應寺に関するもので、主の意を呈する老女連名の奉文となっており、宛名は「池上本門寺 日萬聖人」である。天保6年(1835)から9年の間に出されたもので、この間に將軍の代替りが行われた。天保8年4月に家齊は隠退して西丸へ移徙し、9月に家慶は征夷大將軍の宣下を受ける。移徙前と後で書状を分けると、移徙前は感應寺寺格に関するものが1通(a)、本堂祖師前での祈祷6通(bdefgh)、移徙を知らせるもの3通(cij)、移徙後は移徙無事終了5通(kmoqr)、朱印拝領3通(lns)、登城御礼1通(t)、開堂供養2通(uv)となる。高倉以下杉浦・八十浦・戸沢・花村が誰付の老女であるか当初不明であったが、遠壽院蔵「清水御殿赤坂御殿御用(文政7年)」より、紀州家の老女で齊順付であることが判明した。園橋・たか・つほね・沢野・梅野の主である御簾中が誰か確定できていないが、妙法寺蔵「五百五十遠忌寄進帳」から齊順御簾中豊子の可能性が高い。

鼠山感應寺は池上本門寺48世となった日萬の帰宗願いにより、天保4年に雑司が谷村鼠山にあった安藤対馬守の下屋敷28,642坪が与えられ、天保7年から本堂・客殿・庫裡・玄関など作事が開始され23棟の大伽藍となった。しかし、同12年10月廃寺となる。浄蓮寺38世住職日運は池上本門寺の役僧を兼ねており、平時は池上に滞在し、感應寺の取立てから廃寺まで池上本門寺の役僧として関わった。そのため浄蓮寺に感應寺関係の史料が多く残存することとなった。家慶の思召により取り潰されたわけであるが、家慶付老女の奉文が存在することから、家齊在世中は家慶も承認していたことになる。取潰しに不服であった僧侶らが、これらの書状を証拠として大切に保管したと推察することもできる。

翻刻史料：『大田区史 資料編 寺社2』大田区史編さん委員会、1983年

参考文献：『鼠山感應寺 八年で消えた幻の大寺院』池上本門寺宝物殿、2011年

⑩身延山久遠寺(山梨県南巨摩郡身延町 日蓮宗)

日蓮は文永11年(1274)5月身延山に入山し、同年6月より鷹取山の麓に草庵を結んだ。このことにより、5月を日蓮身延入山、6月を身延山開闢とした。弘安4(1281)年11月には本格的な堂宇を建築し、自ら「身延山久遠寺」と命名した。翌5年日蓮は武蔵国池上で死去するが、その遺骨は身延山に埋葬された。室町時代、11世日朝の時に身延山は隆盛する。中心となる堂宇は現在の本堂祖師堂が並んでいる場所に移転される。

天正16年(1588)徳川家康により朱印状が下付され、21世日乾代に身延山江戸触頭3ヶ寺(瑞輪寺・宗延寺・善立寺)を定め、幕府と身延山との伝達役とした。触頭は宗教行政の役寺として幕府の命令を本山末寺へ伝達する役目を持っていた。その後「慶長法難」、寛文5年(1665)不受不施の寺請禁止などがあったが、徳川家の崇拜や外護を受けて栄えた。

奥院開帳記録(文政13年)、古仏堂祖師江戸開帳公用并御文記録(安政3年7月～安政4年11月)、古仏堂祖師江戸開帳日記録(安政4年6月～11月)、古仏堂祖師江戸開帳厨子日記(安政4年6月～10月)、奥院祖師江戸開帳日記録(文久3年6月～11月)、奥院祖師江戸開帳公用記録(文久2年9月～3年10月)、奥院祖師江戸開帳御文之控(文久3年2月～10月)、奥院祖師江戸開帳前日記録(文久2年9月～3年6月)、奥院祖師江戸開帳書翰(文久2年9月～3年11月)、従御本丸内

之堂山ノ旗曼荼羅江御祈祷ノ記録（嘉永6年～元治2年）、天下泰平・国土安穩・御祈祷執行記録（文久3年3月）、天下泰平・万民悦楽・御祈祷執行記録（文久3年3月）、感応寺記、感応寺引払一件

身延山久遠寺は明治8年（1875）1月の出火で伽藍全部を焼き、什物や書籍の一部も失われたが、数多くの経典や書籍及び古文書類は「身延文庫」として一括され身延山宝物館に所蔵されている。大奥関係文書の大半は身延山祖師像の江戸出開帳に係わる内容である。諸堂復興の一手段である出開帳は、宝暦3年（1753）から文久3年（1863）まで10回行われ、いずれも宿寺は浄心寺であった。開帳期間には祖師像だけでなく、七面大明神像・鬼子母神像・旗曼荼羅など身延山伝来の秘仏や宝物も開帳場に展示された。

出開帳の記録が残っているのは、文政13年（1830）・安政4年（1857）・文久3年の3回分のみである。開帳の関係で大奥と交渉を行う必要があるのが、開帳場への葵紋付戸張・水引・袷袷衣・幕の寄付と江戸城大奥への祖師像はじめ秘仏宝物の御上りである。それぞれがいつから始まったかであるが、紋付戸張等の寄附は文政13年の記録に天明8年（1788）の先例が記されていることから、第3回まで遡ることができる。江戸城大奥への御上りは文政13年の記録にはすでに見られるがそれ以前は不明である。文政13年は閉帳後、9月26日から10月5日まで江戸城本丸大奥に上がる。安政4年は、9月23日から10月29日まで1カ月以上も江戸城大奥は上がり、その後紀州御殿、尾張御殿、大名屋敷を回覧し信州に戻った。文久3年は閉帳後、大奥より先に霞ヶ関御住居・一橋御守殿など家斉息女の各御殿に上がり、10月6日より10月16日まで江戸城大奥へ上がった。

「奥院祖師江戸開帳御文之控」は文久3年の開帳で身延山久遠寺と大奥がやり取りした書状の書留で、差出分と受取分合わせて約160通が収められている（実際の書状は裏紙として利用されたり、焼失したと思われる）。身延山側は住職日琢・奥院孝東院・身延役僧が、大奥側は老女連名・表使連名・御使番・御祐筆・留守居などが差出受取の主体となっている。表使小山が今回の開帳を仕切っており、単独名での書状も数多く見られる。大奥女中の仕事の実態について、従来その説明が具体性に欠ける傾向にあったが、開帳における煩雑なやり取りや大量に必要な書状の作成という事務が見えてきたといえる。

内憂外患で幕府の政権基盤が危うくなった幕末期には、天下泰平や旗曼荼羅に武運を祈ることを身延山久遠寺に依頼し、大奥が祈祷に関わっている。

史料目録：『身延山久遠寺「身延文庫」所蔵文書・絵画目録 昭和48～50年度古文書等緊急調査 身延山久遠寺総合調査報告』山梨県教育委員会、1976年

参考文献：望月真澄『近世日蓮宗の祖師信仰と守護神信仰』平楽寺書店、2002年

⑪善光寺大本願（長野県長野市 浄土宗）・青山善光寺（東京都港区 浄土宗）

善光寺は浄土宗で尼僧を上人に仰ぐ大本願と、天台宗で男僧の貫主を仰ぐ大勧進により護持されている。善光寺の阿弥陀如来像が女性を救うという利益は唱導や絵解きなどを通して全国に広まり、女人救済の寺として認知されるようになる。大本願の上人は公家や大名家から入る慣わしであった。江戸時代初期の智慶の時、徳川家一門の帰依をうけ、谷中に別院を開創した。この江戸の善光寺は火災後青山に

移された。上人は文化5年(1808)から文久3年(1863)まで約50年間は短期の帰国を除き江戸青山に常住した。

3代将軍家光の正室鷹司氏孝子(本理院)は善光寺に対する信仰が厚く、死後伝通院に埋葬されたが、善光寺に分骨として歯が納められた。本理院の菩提のためにひて・梅沢ら奥女中18人の連名で、大本願に地藏像を奉納した。

大本願奥日記(延享2年から明治初期まで)約93冊、日記摘要3冊、入院得度上人位諸願書之案、寺務綱要上下2冊、官務記事、青山善光寺本尊開帳登城日記

「日記摘要」「入院得度上人位諸願書之案」「寺務綱要」「官務記事」は115世智観の自筆記録で、「日記摘要」以外は『信州大本願江戸青山善光寺智観上人』に所収されている。善光寺大本願は尼僧を上人としていることから、大奥との付き合い方は他の寺院とは異なっている。それは上人や老(藁)尼らが大奥へ頻繁に登城することにある。寺院では上人を中心にその世話をする尼僧からなる奥と、寺役人ら寺の運営や事務を行う男性により構成される表からなる。上人は鷹司家や高槻藩永井家などから入っており、将軍家と姻戚関係などにある諸大名の奥向と同じように、年間を通じ年中行事や臨時の慶事における御機嫌伺いと称される贈答行為を行うことになる。つまり江戸城大奥を頂点とする奥向の贈答儀礼の中に組み込まれているといえる。上人を相続し得度式が終わると、本丸老女へ御礼状を差出し、表使・御使番へも挨拶状を出す。継ぎ目御礼として江戸城大奥へ登城し、将軍に目見をする。さらに祈祷所としては、安永5年(1776)4月には将軍の日光社参道中安泰を祈祷した御札を本丸老女に献上し、安永6年12月には翌年厄年となる家治の厄払いの祈祷を行っている。信州善光寺阿弥陀如来像の回向院での出開帳は大勧進が主導であるが、青山善光寺での居開帳と和光寺(大阪市)阿弥陀如来像の青山出開帳では大本願上人が導師を務める。開帳の際は本丸表使に書状で申入れ、開帳の最中は江戸城大奥や大名家の御殿から多くの奥女中が参詣に訪れた。開帳後に江戸城大奥に上がる事例もある。

奥日記には上人の行動や江戸城大奥や大名家奥向との付き合いの記事に加え、大奥女中の動向が記載されているのは津山藩松平家の「七宝御祐筆間御日記」(津山郷土博物館蔵)と共通するものがある。鎌倉英勝寺では水戸家の姫君である上人に仕える奥の組織は、老尼・中藁・小姓・御側・表使・御半下など大名家の奥向と同じような職名と階層になっている⁵⁾が、善光寺大本願の場合も奥日記を丹念に見れば老尼・側尼以外の職制も判明すると思われる。

影印本：鷹司誓玉『信州大本願江戸青山善光寺智観上人』大本願教化部、昭和51年

参考文献：『女たちと善光寺』長野市立博物館、2009年

⑫芦峯寺関係寺社(富山県中新川郡立山町)

江戸時代、日本の他の霊山同様立山も女人禁制をとっていたが、立山は女性救済を実現する霊山であることを強調し、女性の間で多くの信仰を集めた。

立山信仰を描いた立山曼荼羅は、絵解きされ信仰の布教に供された。芦峯寺・岩峯寺宿坊家は農閑期に旦那場へ赴き、曼荼羅などを使い立山信仰を布教した。江戸に立山信仰を広げた芦峯寺宿坊家の一つ宝泉坊は、西尾藩松平(大給)家を檀家としていた。特に老中となった乗全は熱心な信者で、安政5年

（1858）自ら立山曼荼羅を制作し宝泉坊に寄付した。この曼荼羅は文久元年（1861）に江戸で開帳され、江戸城に上がった。19世紀前半に活躍した宝泉坊照円は江戸城内への立山信仰拡充に努めた。仲介役となったのは広大院付元中藤みせ事善珠院と永井氏芳善院及び伝通院である。

御祈禱檀那帳控（天保10年正月）、檀那廻日記（文久元年）、檀那廻日記（文久3年）、御本丸等御初穂覚（文久2年4月）、立山血池地獄血盆納経記帳、越中国立山血池地獄納経施主帳（文久2年4月）、布橋灌頂会勸進記（御本丸等扣帳）（文久2年4月）、布橋灌頂会勸進記（文久4年）、布橋灌頂会執行奉加帳（文久4年以降）布橋灌頂会勸進記（元治元年）、永井芳善院書状、寿操院宛断簡、石堀寄進状（慶応元年）、檀那廻勤帳（元治元年正月）、檀波羅密（慶応3年3月）〔富山県〔立山博物館〕寄託〕

文化から天保にかけて活躍した宝泉坊照円は吉原や江戸城内への立山信仰拡充に熱心で、「御祈禱檀那帳控（天保10年）」によると師壇関係を結んだ大名および奥女中として、尾張徳川家、本丸山野井、松平和泉守家などが挙げられる。しかし、すぐに根付いたとはいえ、嘉永期には家定付老女八重島が芦峠寺相栄坊に地藏像を寄進しているのが確認できるにすぎない。

広大院自身が立山信仰に帰依していた記録はないが、広大院付女中善智院（御年寄藤島）・紫雲院（中年寄花川）・妙智院（中藤頭すま）・善珠院ら10人連名で差出した「為菩提」という断簡が残っている。これには別筆で天保3年（1832）とあるが、広大院が薨去したのが天保15年11月であり、これ以前に御付女中が院号を戴くことはないので、辰年という記載を信じればこれは安政3年の史料となる。特に熱心だったのは永井氏芳善院と共に石堀を寄進した善珠院で、「布橋灌頂会勸進記」に「御本丸等御世話善珠院」とあり、善珠院が江戸城内への普及に一役買っていたことがわかる。隠居した女中である比丘尼は現役の女中より自由が利き、広大院付比丘尼が家定の正室選びに係わったことは夙に知られている。また、本寿院（家定生母）の姉本立院は松平春嶽の大奥工作の手助けをするなど政治的な働きもしている。

残存している古文書からの考察にはなるが、血盆経信仰の普及と布橋灌頂会の勸進に成功したのは文久年間からで、幕府瓦解が間近な時期に当たる。女性を血の池地獄から救うと謂われる血盆経信仰に熱心だったのは、家慶・家定の側室たちである。橋を渡り疑似再生を体現する布橋灌頂会の勸進帳には天璋院、和宮を筆頭に、家斉の息女や御三家の正室らとそれらの方々付女中たちが名を連ねている。しかし、將軍付女中の名前は見受けられない。芦峠寺での布橋灌頂会の儀式に直接参加できない大奥の女性たちは、儀式で使用する白布を寄付し、その名前が勸進帳に記載されている。

参考文献：福江充『江戸城大奥と立山信仰』法蔵館、2011年

⑬萬福寺塔頭法林院（京都府宇治市 黄檗宗）

萬福寺は、寛文元年（1661）に、中国福建省から渡来した隠元（1592～1673）によって開創された黄檗宗の大本山。法林院は喝禪が寛文9年（1669）に休息所として建立した萬福寺塔頭。喝禪は明暦元年（1655）に木庵とともに日本に渡来し、寛文4年に隠元が引退して木庵が萬福寺住職となると常に傍らに持して補佐した。喝禪と桂昌院との結びつきは、桂昌院付老女小川・岡本が寛文10年7月7日に廣

濟寺（館林城主であった徳川綱吉に許可を得て潮音が開いた関東初の黄檗道場）を訪れ、喝禪の弟子である文海に会ったことに因る。喝禪の由来に関心を持った桂昌院が將軍家綱との謁見を取り持った。謁見の際には桂昌院と綱吉も同席し、家綱により寺建立のため500両が下賜された。

法林院建立由記写、大檀桂昌院大夫人法林齋糧之簿（寛文12年12月～宝永2年10月）、法林院祠堂簿（寛文12年～寛保元年）、江府進上物簿（元禄7年～宝永元年）、桂昌院書状喝禪宛、小川・岡本書状6通、小川・岡本・ふく書状5通、るつ・岡本・福井書状2通、岡本・福井書状11通、福井・りう書状6通、けんちょう書状7通、るつ書状、ていかん書状、中野書状、うんしん書状、卷子書状1（けんちょう→文海、小川・岡本→喝禪、小川・岡本→喝禪・雲巖、小川・岡本・ふく→喝禪・雲巖）、卷子書状2（岡本・福井→喝禪、岡本・福井・りう→喝禪、福井・りう→喝禪2通、せつ音院・本音院→喝禪）、卷子男性書状（木下伊豆守他差出喝禪宛）

書状の差出人の大部分を占める桂昌院付女中について先ず整理をしておきたい。「法林院建立由記写」「大檀桂昌院大夫人法林齋糧之簿」より、法林院起立に係わった老女は小川・岡本で、けんちょうも桂昌院の側に仕えている。「江府進上物簿」では桂昌院付女中の筆頭を女人頭と呼んでおり、起立について書かれた史料は後世の作の可能性があり、当時使われていた老女という役名を当てたとされる。「江府進上物簿」で女人頭の変遷を追うと元禄7年（1694）から9年まで岡本・福井、10年岡本・福井・りう、11年途中から宝永元年（1704）まで福井・りうとなる。るつは岡本・福井とは別に女人頭と記載されているので、主が違っていると勘案できる。また、ふくが福井になったと推察できる。近世前期は祖心尼のように尼僧で大奥に仕えている者もいることからけんちょうも桂昌院付女中と考えられる。

書状の内容は、桂昌院からの金子など贈物に関する事、唐茶・香・生薬・墨跡など法林院から送られたものの御礼、桂昌院弟の家である本庄家に関する事などで、必ず桂昌院が息災であることを書き添えている。同じく桂昌院とかかわりの深い護持院の史料と比較してみると、護持院日記には桂昌院付女中がほとんど登場しない。従って、綱吉將軍期の大奥の様子を知ることができる貴重な史料といえる。

桂昌院の自筆書状は桂昌院が「和尚様」（隠元か木庵）に菩薩戒を授けられ髪剃をしていただいたことの御礼で、自分の名前を「慶」と記している。「大檀桂昌院大夫人法林齋糧之簿法林院」は建立由来と拝領記録からなる。拝領記録は寛文12年（1672）12月から桂昌院死去の宝永2年10月までで、毎年12月に桂昌院から金子30両と絹布などが下賜されている。桂昌院の格が上がる度に少しずつ数が増えており、60歳・70歳・80歳の算賀（10年ごとの年祝い）と叙任の時は臨時の拝領があった。遺金100両と合わせて合計1150両の支援を受けている。

⑭長命寺（滋賀県近江八幡市 天台宗）

長命寺は西国33カ所第31番目の札所で、平安後期にはその存在が確認できる。近江守護の佐々木家の庇護を受けて栄えるが、永正13年（1516）の合戦で焼失した。室町時代から織豊時代にかけて再建された堂宇は、整備され現在に至っている。近世の長命寺は延暦寺の末寺であり、最盛期には子院19坊を数えている。

長命寺領には他に穀屋尼寺、西方寺、日吉神社があった。穀屋寺は現在長命寺の表参道入口脇に所在

し、江戸時代には単に「穀屋」と呼ばれ、その開基は春庭慈芳尼とされる。慈芳は越前国織田氏の息女で、勧進により長命寺の再建に寄与したといわれる。「穀屋」は寺社の修理や再建費を募る、つまり勧進する者が拠点とした所で、長命寺穀屋もまた長命寺復興の勧進を担ったのであるが、その主役となったのが勧進比丘尼であったのは珍しい。この穀屋に伝わったのが穀屋文書である。

〔御城奥向御信仰儀ニ付覚書〕（寺院9-16）、〔御暇願ニ付書状〕（寺院9-25）、〔江戸城御能番組并割付〕（諸藩1-21）、〔西丸類焼ニ付書状〕（諸藩1-22）、〔公方様御台様より白銀被下ニ付書状〕（諸藩1-23）、（幕府・大奥1-1～690）〔滋賀県立安土城考古博物館寄託〕

穀屋文書は大量に存在し、幕府・大奥690点は大奥関係史料であることから、ここで列挙することは避け、山本順也氏が作成された目録を参照していただきたい。著者が実見できたのは幕府・大奥690点のうち1～330までである。従って上記に書き上げた史料には、目録より江戸城大奥関係と思われるものも含む。また、寺院の縁起などを記した「記録帳」（文政8・10・11年）にも大奥との関係を示す内容が記載されている。

穀屋文書の特徴はやはり他に類を見ない量の多さであろう。690点の大半を占めるのが表使との書状である。書状の場合、裏面が利用されたり、同一内容のものは廃棄されたり、あるいは冊子に転写され原本が残っていない例が多々あるが、これだけの史料が残されているのは珍しい。表使が差出か受取になっている書状は約272点（冊子状になったものの中にも表使の書状は含まれているので数はさらに増える）ある。これらの書状などをもとに表使の一覧を作成したのが【表3】である。家重将軍期から家茂将軍期までの表使の名前が確認できた。従って書状に記載された表使の名前と表3を突き合わせれば、書状の大凡の年代がわかることになる。いうまでもないが女中名は繰り返し使われもので、家斉期初期の小山と家慶期以降の小山は別人である。老女に比べると入れ替わりが頻繁であるが、これは昇格があるからであろうか。一方表使のまま奉公を終える者もいる。書状は本家（将軍）付単独のものが圧倒的に多いが、将軍と御台所からの白銀下賜については、両所付の連名となっている。

書状は内容により年始、扶持、参府、御札献上、白銀の下賜等に大別できる。穀屋は紛争により宝永4年（1707）長命寺本堂左下にあったのが参道入り口脇に移される。堂舎修理は寺僧が行うようになり、穀屋の権利は縮小され、さらに東西に分裂する。西穀屋の頭分は代々慈光名を継承し、一時中断していた将軍家への御札献上を復活させ、尼僧が参府して御札を献上し、将軍家より白銀が下賜され、扶持をいただく。この一連の流れに関することが書状や「参府録」よりわかる。

表使の仕事を補佐する御使番の書状は21点ある。年代の書かれた書状が比較的数量多くあるのも穀屋文書の特徴といえる。159は松崎が八十瀬と改名して御台付から将軍付老女となり、御台付老女に花崎が昇格したことを告げる御使番の書状である。年代は「文化丁卯（4年）三月三日」となっているが、八十瀬が将軍付となったのは文化2年12月であることは、幕府の記録である「女中帳」⁶⁾などから明白である。年代が後から書かれ間違ったか、一年以上経ってから知らされたかであるが、年始の書状は毎年送るものであり、名前が違うことは好ましくない（123では嶋田の名前が漏れているので認め直して差し出すよう指示している）。従って後日加筆した時に年代を間違った可能性が高い。

長命寺観音像の打敷は2代将軍秀忠から代々、大奥より寄進される慣例になっていると由来に記され

ている。18世紀半ば頃からは長命寺本尊の開帳・開扉のたびごとに、本丸大奥から紋付打敷が寄進されるようになる。紋付打敷寄付願いの時も慈光は参府している。41は慈芳の木像及び穀屋の修復が自力では難しいので寄進を願った結果、老女・御客応答・表使より寄付を募り金10両を寄進するという内容である。この寄進は女中たちによる個人的なものであり、浄光寺の寄進とも共通する。穀屋では将軍や御台所への献上に合わせて、老女や表使にも御札・御蔭守・扇子を進上している。常日頃の交渉を円滑に行うことに加えて、いざという時に頼るための布石ともいえる。

史料目録：山本順也「穀屋文書（長命寺文書のうち）について―穀屋文書解題―」（滋賀県立安土城考古博物館『紀要』第19号、2011年）

参考文献：山本順也「長命寺穀屋の近世的展開」（『宗教民俗研究』第21・22号、2011・12年）

3. 大奥関係資料を所持する寺院の特徴

大奥女中が信仰や支援をした寺院の大半は、徳川将軍家と関わりのある寺院である。将軍家との関係で寺院を分類すると、菩提寺、祈祷所、霊廟や位牌が置かれ法要を行う寺、御膳所、朱印状を交付された寺などに分けることができる。言うまでもないがすべての寺院に万遍なく大奥関係資料が残っているわけではない。つまり、大奥と繋がりのない寺院も多数存在した。

2章の事例から大奥と関係が深かった寺院を選別すると、祈祷所に指定された寺、霊廟や位牌が置かれ法要・供養を行う寺と見ることができる。天正18年（1590）4月、徳川家康は浅草寺を祈祷所に増上寺を菩提所に定めたといわれる。2代将軍秀忠の時代に、天海が上野に寛永寺を建立して将軍家の祈祷寺として位置づけるが、4代将軍家綱が埋葬されてからは菩提寺としての役割が中心となる。今回、菩提寺である増上寺・寛永寺・伝通院についての考察は行わなかった。その後、江戸城本丸・西丸や大奥の祈祷所として認められる寺院は各地に広がり増加する。2章の寺院の内、将軍家や御三家の祈祷寺は護持院、身延山久遠寺、善光寺、遠壽院、法養寺、浄光寺である。逆の発想で行けば将軍家の祈祷所を調査すれば大奥関係資料が発掘される可能性が高いといえる。実際、寺院ではないが祈祷所である穴八幡宮には大奥との関係を示す史料が存在すると思われるが、現在調査は受け入れていない。霊廟や位牌が置かれ法要・供養を行う寺としては妙定院、濟松寺、祐天寺を挙げることができる。

別の視点で見ると、尼僧が上人の寺院、御台所・将軍生母・姫君が帰依した寺、大奥女中を開基とする寺が大奥との結びつきが深い寺院といえる。

ここからはいくつかの事例をピックアップして、気が付いたことや今後の課題となることをまとめて置きたい。

護持院日記を見ると、奥年寄と呼ばれる老中が表向からの祈祷だけでなく、桂昌院や鶴姫からの依頼の際も寺側との仲介役となっている。いつから表使を中心とした奥女中の役割となったのか、女中の職掌も含めて検討する必要がある。祠堂金について妙定院の項で取り上げたが、岩橋の実家滋野井家からの祠堂金も運用に回されている。バックにある増上寺の貸付を視野に入れて考察を深めたい。

大奥から葵紋が付いた什物が寺院に寄進されているが、その葵紋についての御触が明和5年（1768）

に出された。諸寺社へ開帳や平時の際、葵紋を付けた品を奥女中は安易に、同紋を許された諸大名は菩提寺以外へ寄付しないよう制限を加えたものである。寺社に対してもすでに所持している品の使用を制限した。それを受けてか東漸寺（千葉県）では所持する品を書き上げた「葵御紋附御届書」を提出している。幕末期の史料であるが、開帳の際に使用される葵紋付戸張等の寄付について、大奥は身延山久遠寺に対し寺社奉行の許可が出た後でないと行えないと通達している。葵紋付什物の寄進・使用に関する大奥と寺社との関わりについても、幕府の政策と絡めて探究を深めていく必要がある。

『東本願寺史料』（名著出版、1973年）に、京都出身の上藤御年寄が現役の時に、上洛して東本願寺に参詣している記録がある。「関東御本丸上臈衆姉小路殿両堂参詣二付、菊之間より達有之、委曲如別記」（天保13年8月14日条）。姉小路はこの後も弘化3年・嘉永2年と参詣している。姉小路以外では花園（文政4年）・山野井（天保9年）・万里小路（天保12年）・歌橋（嘉永3年）と4例がある。京都出身の上藤御年寄と関西の寺院との関係にも着目していきたい。

おわりに

寺院の資料を使って論文を書く研究者は仏教系の大学を卒業した人たちが中心となる。宗派の違いも重要で、例えば日蓮宗なら、立正大学や身延山大学の教員やその卒業生が、日蓮宗寺院の研究を行うということになる。寺院へのコンタクトは容易であるが、宗派の枠組みを超えることができないという不自由さがある。

旗本井関家に嫁いだ隆子はその日記の中で、天保期の仏教のあり方や堕落した僧侶について痛烈な批判をしている。⁷⁾ 仏教が繁栄し特に日蓮宗に人気があり、将軍が傾注し大奥女中たちも信者となるものが増加した。そのため全く信仰心がないにも関わらず表面上信者を装う者もいた。また、堂宇再建のため毎日托鉢して歩く奇特な僧がいたが、その実態は大変な好色者で困っていた女たちを養う費用に充てていた話などから批判を展開している。近世において仏教や寺院は生活に根差したもので、様々なところに入り込んでおり、現在の感覚で捉えてはいけぬ。私は寺院に携わる者でない利点を生かして、広角的に江戸時代の寺院の実態や役割に目を向けて、大奥との関係について捉えていきたい。

本稿の趣旨は各寺院が所蔵する大奥関係資料の紹介にすぎないが、今後はそれぞれの古文書の内容を吟味し、時間をかけて分析していきたい。その時、特に各寺院所蔵の史料を横断的に分析することに重点を置きたい。特定の奥女中や大奥女性を基軸にして関わった寺院をすべて見ていくことや、祈祷寺、開帳、堂宇再建などテーマにより複数の寺院を比較すること、時代背景として幕府の政策を念頭に置き時代で区切ってみていくなど、いくつかの視点が考えられる。

はじめて妙定院を訪れたとき、御住職から「墓石に刻まれた〈離染院〉という人は大奥女中でしょうか」と尋ねられた。過去帳で判明するかと思ったが「御本丸 左寶司 安藤氏」（下線著者）とのみあり職制や女中名は不明なままとなった。阿弥陀如来立像の厨子裏面に「此阿弥陀仏ハ天下泰平の御ために黒御本尊をうつし奉り左寶司へ授け与ふ 増上寺大僧正定月作」と記されていた。また離染院書状に「(前略) 惇信院様常々御信心あらせられ候黒本尊様・文殊様・弁天様妙定院江御安置申上、永々妙定院

ニ而御武運御長久之御祈願申上られ候様ニ、松嶋殿浦尾殿其外御年寄衆ニもよろしく御頼申遣し候様ニと被申候（後略）」とあり、家重付女中で、黒本尊を寄進した女性であることがわかった。まだぼんやりとしているが離染院の輪郭が見えてきたといえる。寺院側は関係する奥女中の素性の解明、什物の由来がわかる事、古文書の解説などをわれわれ研究者に期待している。寺院の資料を活用する場合は、研究のためだけではなく寺側の期待にも応えていくことが肝要といえる。

【註】

- 1) 高木昭作『江戸幕府の制度と伝達文書』角川書店、1999年
- 2) 『我孫子市史 近世編』天保の改革の際、幕府は年利一割五分を改め一割二分とした。
- 3) 三浦俊明『近世寺社名目金の史的研究』吉川弘文館、1983年
- 4) 拙著「姉小路と徳川齊昭 内願の構図について」(『茨城県史研究』94号、2010年)
- 5) 床次和子「鎌倉英勝寺の祠堂金貸附」(『史論』第9集、1961年)
- 6) 「女中帳」国立公文書館所蔵
- 7) 深沢秋男『井関隆子の研究』和泉書院、2004年

本稿は執筆に当たり、「穀屋文庫」の閲覧に際しては長命寺住職武内隆韶氏、滋賀県立安土城考古博物館高木叙子氏に便宜を図っていただき、近江八幡市市史編纂室山本順也氏にお世話になった。展覧会でお世話になった方々と合わせて、厚くお礼申し上げたい。

【表1】 妙定院の過去帳及び「妙定院祠堂金之控」に記載された幕府関係女中

没年年月日	戒名	俗名・続き柄	所属	祠堂金他
明和2年8月26日	離染院殿安譽英心法尼	御本丸左宝司 安藤氏	家重付表使カ	金50両 10両
安永2年6月20日	戒淨院殿成譽清香貞幹大姉	御本丸 松島事	家重・家治付老女	金20両
安永8年7月24日	清智院殿玉室恵鏡大禅尼		家重付表使	
寛政元年4月25日	祐清院殿量譽圓貞壽正大姉	御本丸 花蘭事	家治付老女	金20両
寛政6年正月2日	浄真院殿恵性妙智大姉	御本丸 富岡	家治付御客応答カ	金7両
寛政6年7月24日	榮真院殿長譽松月妙昌大禅尼	御本丸 岩橋事	家重・家基付老女	金3□合
寛政6年12月9日	衆音院念譽善休法尼	御本丸 マキコト		金10両
享和元年6月12日	是性院真元妙薫法尼	榮真院殿附女中	梅カ	
文化2年12月9日	浄妙院薫譽祐香信女	江川事		
8月21日	嚴淨院加屋昌榮大姉	御本丸 浦尾殿	家重・家治付老女	
	心花院生誉蓮池	松野	家治付表使カ	逆修金5両

*所属は著者が補った。

【表2】 祐天寺の過去帳などに記載された幕府関係女中

没年	女中	所属	続柄	備考
享保7年	梅津	松姫付老女		
享保16年	清円大法尼	家継乳人		
享保18年	局（本性院）	竹姫付局	松平富之助（兵庫）娘	埋葬
宝暦4年	秀小路	天英院付老女	万里小路雅房娘	
明和元年	萩原	竹姫付上臈		
安永2年	松嶋	家重・家治付老女		
安永5年	芳川	竹姫付若年寄		本性院・梅林院とともに合葬
天明元年	佐保山	田安家宝蓮院付上臈		
寛政3年	梅小路	種姫付上臈	39代藤波季忠娘	埋葬
寛政3年	森衛	竹姫付若年寄	松平富之助（兵庫）娘 本性院妹	埋葬
文政7年	保光院	御年寄瀬川の母		
天保3年	瀬川	家斉付老女		分骨、祠堂金100両
天保4年	万里小路	家慶付上臈御年寄		法号と祠堂金20両
天保6年	於さま	喬子付		
天保10年	飛鳥井	家斉・家慶付上臈御年寄	平松時行娘	法号と祠堂金200両
天保10年	三輪山	田安家御簾中裕宮付老女		法号と祠堂金20両
弘化4年	お定	家慶側室	御小姓組押田勝長娘・ 家慶生母お楽姪	法号
嘉永元年	瀧浦	田安家御簾中裕宮付老女		埋葬 祠堂金30両
嘉永4年	細井（皎月院）	田安家御簾中裕宮付	鍼博士藤木成練娘	埋葬 祠堂金30両
嘉永5年	沢山	田安家御簾中付小上臈		埋葬 祠堂金30両
安政2年	岩野（願生院）	家斉付表使		埋葬
安政4年	智願院	淑姫付		位牌と法号
安政5年	八重尾	田安家御簾中付老女		法号と祠堂金30両
慶応元年	裏辻	田安家上臈御年寄	40代藤波寛忠娘	梅小路と合葬
明治2年	花川	田安家御簾中付老女		埋葬、位牌は八重尾と合祀
明治2年	八十野	飛鳥井の局		法号と祠堂金
明治6年	千浦	歌橋付女中		埋葬
明治10年	歌橋	家定付上臈御年寄	40代藤波寛忠娘	埋葬
明治16年	岩倉	溶姫付上臈御年寄	40代藤波寛忠娘	歌橋と合葬

* 『祐天寺年表（「本堂過去霊名簿」など）』より作成

* 「本堂過去霊名簿」には土佐藩山内家・生実藩森川家・津藩藤堂家・松本藩水野家・紀伊徳川家・高遠藩内藤家・三草藩丹羽家・八戸藩南部家・壬生藩鳥居家・萩藩毛利家・秋月藩黒田家・新発田藩溝口家の人々やその御付女中の法号も載っている。

【表3】 表使一覧

年代	本丸					西丸					
	将軍	御台・大御台・世子				世子・大御所			御簾中		
宝暦5～10年	家重	富尾	富田	沢田	戸川	政井					
安永2年	家治	富田	富野	民野	生駒						
安永7年頃		富野	民野	生駒	菊野	岩野	松野				
天明4年		富野	民野	菊野	岩野	小山		家斉	松本	峯野	沢田
		富野・民野、隠居									
寛政3年	家斉	菊野	小山	松本	峯野	沢田					
寛政4年		菊野	小山	松本	峯野	沢田					
		菊野	小山	松本	沢田	岩井					
		菊野	小山	松本	沢田	岩井	富野	寔子	長瀬	勝井	成瀬
		小山	松本	沢田	岩井	富野	浜田				
文化元年		沢田	岩井	富野	浜田	藤野	石野				
文化4年		沢田	岩井	富野	浜田	藤野	石野	勝井	成瀬		
文化7年		岩井	富野	浜田	藤野	石野	富田	勝井	成瀬		
文化10年		岩井	富野	藤野	石野	富田		勝井	成瀬	山村	
文化13年		岩井	富野	藤野	石野	富田	小倉	勝井	成瀬	山村	
文化15年		富野	藤野	岩井	富田	小倉		勝井	成瀬	山村	長瀬
文政2年		富野	藤野	石野	富田	小倉	田村	織江	勝井	成瀬	山村
文政3年		富野	藤野	石野	富田	小倉	田村		勝井	成瀬	山村
文政5年		藤野	石野	富田	小倉	田村					
文政8年		藤野	嶋田	小倉	田村	浜田		岩井	福山	関川	浦瀬
文政11年		藤野	嶋田	小倉	田村	浜田		福山	関川	谷浦	浦瀬
文政12年		藤野	嶋田	小倉	田村	浜田		関川	谷浦		浦瀬
天保元年		藤野	嶋田	小倉	田村	浜田	駒井				
天保2年		嶋田	小倉	浜田	駒井			関川	谷浦		浦瀬
天保4年		嶋田	小倉	浜田	駒井	広瀬		関川	谷浦	川野	浦瀬
		嶋田	小倉	浜田	広瀬	梶尾	谷浦				
		嶋田	小倉	広瀬	梶尾	谷浦					
天保8年～	家慶	小倉	梶尾	小山	浦瀬	三沢		家斉	嶋田	広瀬	谷浦
		小倉	梶尾	小山	浦瀬	三沢	岩田		嶋田	広瀬	谷浦
		小倉	梶尾	小山	浦瀬	岩田	織江		嶋田・谷浦、天保12年家斉死後家慶付に		
天保12年～		嶋田	小倉	浦瀬	梶尾	谷浦	小山	岩田	織江	寔子	関川
天保14年		小倉・浦瀬、奉公御免						岩山	田村	藤沢	
弘化2年		嶋田	梶尾	谷浦	小山	岩田	織江	藤野			
		嶋田	梶尾	谷浦	小山	岩田	織江	藤野	村瀬		
嘉永6年		谷浦	小山	岩田	織江	藤野	村瀬		家定	川井	福井
		谷浦・岩田・織江、隠居									
嘉永6年	家定	小山	藤野	村瀬	川井	岡野	藤江				
嘉永7年		小山	藤野	村瀬	岡野	藤江	浜田				
安政5年		小山	藤野	村瀬	岡野	藤江	浜田	家茂	室田	太田	
		藤野、隠居									
安政5年～	家茂	小山	村瀬	岡野	藤江	浜田	室田	太田			
元治元年		岡野	藤江	浜田							
		岡野	浜田	嶋田							

*「穀屋文書」より作成し、「女中帳」や代替りの記録などから一部補った